

予型論への認知的アプローチ

デイモン・チャ
永江 桂子

序論

旧約聖書と新約聖書の予型論的解釈は、教父の時代から認識され用いられてきた¹。その時代から今日に至るまで、予型論的釈義をどのように理解すべきであるかは、難しい問題である。しかしながら、予型を正しく理解することは、新約聖書の記者たちが旧約聖書をどのように釈義したか、そして旧約聖書がメシアであるイエスをどのように指し示したか（あるいは指し示さなかったか）を考察する上で、極めて重要である。

本論文は、聖書のメタファーと予型を理解し解釈するための基盤とアプローチを提供することを目的とする。このアプローチは、認知言語学のブレンディング理論を用いた認知的アプローチである。I章ではビール（G.K. Beale）の予型論を簡単に説明し、II章で認知言語学におけるブレンディング理論の概要を記す。III章では本論文が提案する認知的アプローチを提示し、IV章において、2つのテストケースを用いて、認知的アプローチを提示する。そのテストケースとは、ヨシュア記2章とIコリント10章1-4節である²。

¹ Cf. Irenaeus, *On the Apostolic Preaching*, trans. John Behr (Crestwood, NY: St. Vladimir's Seminary Press, 1997).

² これらの聖書箇所は、従来から議論がなされており新しいものではないが、認知的アプローチを提示するために、これらをテストケースとして用いる。

I. ビールの予型論

本論文は、聖書のメタファーや予型をよりよく理解するために、ビールの方法論を基盤として、認知言語学のブレンディング理論を用いたアプローチを構築し提案するものである。そこで、この章ではビールの予型論について取り上げる³。ビールは、新約聖書における旧約聖書引用の綿密な研究に基づき、優れた釈義方法論を構築して提供している⁴。ビールは予型の前提条件を次のように提示する⁵。

- ① 集団としての連帯あるいはその代表が前提とされる。
- ② 上記①に基づいて、キリストは旧約聖書のイスラエルと新約聖書における真のイスラエル—すなわち教会—を代表していると見なされる。
- ③ 歴史は賢明で主権的な計画によって統一され、過去の出来事が将来の出来事に対応し、それを指し示すように設計されている。(マタイ 11:13-14 参照)
- ④ キリストにあって、終末論的な成就の時代が到来したが、まだ完成されていない。
- ⑤ 上記④の結果として、聖書の歴史のより後の時期に書かれた部分は、より早い時期に書かれた部分を解釈するためのより広い文脈として機能す

³ 予型論は聖書解釈の1つとして広く認識されている。本論文は予型論を前提として、その解釈のための方法論を提示することを目的としている。予型論については、以下の文献を参照されたい。

・ G.K. Beale, *Handbook on the New Testament Use of the Old Testament: Exegesis and Interpretation* (Grand Rapids, MI: Baker Academic, 2012).
 ・ Leonhard Goppelt, *Typos: The Typological Interpretation of the Old Testament in the New*, trans. Donald H. Madvig (Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1982).
 ・ Geerhardus Vos, *Biblical Theology: Old and New Testaments* (Edinburgh: Banner of Truth Trust, 1975).

⁴ この方法論は新約聖書の記者たちが旧約聖書を解釈するために用いた方法であるとビールは語り、その9段階のプロセスを詳細に述べている。予型論についてはステップ7「著者の解釈的（釈義的）な旧約聖書の引用を分析する」にある。Beale, *Handbook*, 55.

⁵ Beale, *Handbook*, 53.

ることが導き出される。なぜならそれらすべては同じ究極の神的著者によるものだからであり、著者である神はそれぞれの人間の著者に靈感を与えたからである。この前提によって導き出される結論は、終末の中心であり贖いの歴史のゴールであるキリストとその栄光こそが、早い時期に書かれた旧約聖書とその約束を解釈するための鍵であるということである。

ビールは予型論を次のように定義する。予型論とは「神の特別啓示の歴史的枠組みの中で、人、出来事、制度、その他について啓示された真理の中に存在する類推的対応の研究であり、それらは回顧的見地から、預言的な性質を持ち、その意味において段階的に上昇する。」⁶ この定義から、予型に必要な判断基準は次のとおりである⁷。

- ① 対型との類推的対応 (Analogical Correspondence)
- ② 史実性 (Historicity)
- ③ 将来を指し示す (Pointing-Forwardness)⁸
- ④ 対型に向かう段階的上昇 (Escalation)⁹
- ⑤ 対型からの回顧 (Retrospection)¹⁰

予型に必要な判断基準として最初に掲げられている基準は、「類推的対応」すなわちメタファーである¹¹。予型はメタファーのサブセット（全体の中の一部）である。予型はメタファーであることなしに予型であることはできない。した

⁶ Beale, *Handbook*, 14.

⁷ Beale, *Handbook*, 19.

⁸ 「人・事物・出来事が将来の人・事物・出来事を予表するためにデザインされることが明らかである。」 Beale, *Handbook*, 57.

⁹ 新約聖書の中の将来の対型は、「旧約聖書の予型との関係において何らかの形で高められている。」 Beale, *Handbook*, 14.

¹⁰ 「新約聖書の観点から見ると、旧約聖書の予型は成就されている。」 Beale, *Handbook*, 15.

¹¹ Beale, *Handbook*, 14, 19.

がって、予型を適切に釈義するためには、メタファーの適切な理解もまた求められるのである。この点において、ビールの説明は残念ながらやや不足している。そこで、本論文において、ブレンディング理論を用いてビールの釈義法を補完し、メタファーそして予型のためのより強力な基盤とアプローチを提供する。尚、ブレンディング理論の観点から、類推的対応に集中して論じることとする。

II. ブレンディング理論 (Conceptual Blending Theory)

1. ブレンディング理論とメタファー

認知言語学は、すべての認知と表現の形式が現実体験に基づくことを明らかにしてきた。HAPPY IS UP や SAD IS DOWN¹² のような共通のメタファーは、時間と文化を越えて見られる。メタファーは、人類が歴史や文化を通して共有してきた経験を前提として認知され理解される。メタファーの定義は、“ある事物を別のことばで理解し、経験すること”¹³ である¹⁴。

認知言語学におけるブレンディング理論 (Conceptual Blending Theory)¹⁵ は、意味を構築するための認知的作業である¹⁶。ブレンディング理論は、メタファーを4つのメンタル・スペース (mental space)¹⁷ を用いて表すことによって、その意味を構築する。その4つとは、起点スペース (source space)、目標スペース

¹² 通常、目標スペース (たえられるもの) が最初に書かれ、次に起点スペース (たえるもの) が書かれる。メタファーは英語の大文字で記される。

¹³ George Lakoff and Mark Johnson, *Metaphors We Live By* (Chicago: University of Chicago Press, 1980), 5.

¹⁴ ブレンディング理論 (CBT) では、隠喩 (metaphor)、類推 (analogy)、直喩 (simile) はすべて同じ基本的な認知操作を共有しているため、それらの間で鋭い分割を行うべきではないとしている。したがって、これらすべての用語を「メタファー (metaphor)」と同義語として扱っている。Gilles Fauconnier and Mark Turner, “Conceptual Integration Networks,” *Cognitive Science* 22 (1998), 62.

¹⁵ 「概念ブレンディング理論」とも呼ばれる。

¹⁶ Gilles Fauconnier and Mark Turner, *The Way We Think: Conceptual Blending and the Mind's Hidden Complexities* (New York: Basic Books, 2002).

¹⁷ “Mental space” は “input” とも呼ばれる。本論文では一貫性を保つために「メンタル・スペース」や「スペース」を使うことにする。

(target space)、総称スペース (generic space)、融合スペース (blended space) である。起点スペースはメタファーのための構造を提供し、目標スペースは主題を提供する。総称スペースは起点スペースと目標スペースの間の共有の要素と構造を連結する。融合スペースは起点スペースと目標スペースから要素が選択されたり、削除されたりする場所である。融合スペースは、起点スペースと目標スペースからのみ生成可能な独自の構造とシナリオを創り出す。ブレンディング理論は、メタファーの意味がどのように創出されたかを提示することにより、その意味を明確に表すアプローチを提供する。またブレンディング理論は、自由な解釈に対してだけでなく、寓喩的な解釈に対して制約を与える。さらにこのことは、聖書と現代の読者との間の解釈学的なギャップを乗り越えるために役立つであろう。

2. マッピング・ネットワーク (Mapping Network) 【図1参照】

メタファーがどのように分析されるかは、マッピング・ネットワークを用いて図で示すことができる。ブレンディング理論のマッピング・ネットワークには、前述のように、4つのメンタル・スペース (起点スペース、目標スペース、総称スペース、融合スペース) がある¹⁸。これらのスペースの中で、「マッピング (写像)」はある要素とそれに対応する要素を結びつけて行われる (図1参照)。ネットワークには、シンプレックス、ミラー、シングルスコープ、ダブルスコープの4つの種類がある。メタファーは、シンプレックス・ネットワークを除いてすべてに見られる。聖書には確かにダブルスコープのメタファーがあるが、予型としての役割を果たすものは、ほとんどがミラー・ネットワークかシングルスコープ・ネットワークのメタファーである。そこで本論文では、それらについてのみ論じることとする。

3. ミラー・ネットワーク (Mirror Network) 【図2参照】

ミラー・ネットワークでは、すべてのメンタル・スペースが同じ構造を持つ

¹⁸ これら4つのスペースだけが最小限のマッピング・ネットワークを表す。複数の起点スペースと目標スペースが1つのマッピング・ネットワーク内に存在することも可能である。

ている。トポロジーとは、スペース内の要素間の関係の構造のことである¹⁹。例えば、デイモンは、昨年走った大阪マラソンを友人のジェイムスが走っているのを見ている。このとき、ジェイムスは、途中でデイモンのタイムよりも10分ほど速く走っている。このとき、デイモンが「彼は私に勝っている」と言うと、それはミラー・ネットワークを使っていることになる(図2参照)。このネットワークでは、4つのメンタル・スペースすべてにおいて、大阪マラソンという構造は同じである。しかし、要素や関係には違いがある。デイモンは2018年に大阪マラソンを走ったが、ジェイムスは2019年に走っている。両者のスプリットタイムはわかっているが、ジェイムスの完走タイムは不明である(デイモンの完走タイムは4:30:00)。しかし、融合スペース(blended space)は、その中でしか生まれないユニークなシナリオ(あるいは構造やイメージ)を生み出す²⁰。それは、他のどのメンタル・スペースにもないシナリオである。そのシナリオとは、デイモンとジェイムスが互いに競い合って大阪マラソンを走っているというものである。

4. シングルスコープ・ネットワーク (Single-scope Network) 【図3参照】

シングルスコープ・ネットワークにおいて、起点スペースは、選択された要素とともに融合スペースのための構造あるいはフレームを提供する。このことを説明するために、旧約聖書や日本語の中に見られる一般的な認知メタファーを例として挙げることにする²¹。それは、「怒りは容器の中の液体の熱である(ANGER IS THE HEAT OF A FLUID IN A CONTAINER)」というメタファーである²²。このメタファーから、「怒りは体内の液体であり、その熱が高まると爆発して他人を傷つける」という概念が生まれた。日本語では一般的に、「怒りが頂点に達した、怒りが込み上げる、頭から湯気が立つ」というように本質的

¹⁹ 構造やフレームは、「関連する行動、出来事、関与者の性質を明記する。」 Fauconnier and Turner, *The Way We Think*, 122.

²⁰ Fauconnier and Turner, *The Way We Think*, 122–26.

²¹ Paul A. Kruger, “A Cognitive Interpretation of the Emotion of Anger in the Hebrew Bible,” *Journal of Northwest Semitic Languages* 26 (2000), 181–93. 創 30:2; 出 32:10; ナホ 1:3,6 参照。

²² Zoltán Kövecses and George Lakoff, “The Cognitive Model of Anger Inherent in

に同じルーツのメタファーが使われている²³。ここでの構造は、加熱された液体を保持する容器があり、そこから別の物体に向けて噴出することができる2本の導管を有している。容器、導管1、導管2、加熱された液体は、それぞれ起点スペース内の要素である(図3参照)。目標スペースは主題を提供し、融合スペースのための選択された要素を提供する。図3では、人がメタファーの主題である。目標スペースのそれぞれの要素には、起点スペースの中に対応する要素を見いだすことができる(人の身体=容器、鼻の穴=導管1、口=導管2、怒り=加熱された液体)。そして、融合スペースは、ユニークなシナリオを生み出す。加熱された液体が人の体内で上昇して他の人に向けて噴出し、その人を傷つけるというシナリオは、融合スペースの中でしか見つけることができない(図3参照)。もちろん、怒っている人が実際にその身体の中に相手に噴出するような加熱された液体を持っているわけではない。しかし、このメタファーは、A HUMAN BODY IS A CONTAINER, ANGER IS HEAT, ANGER IS THE HEAT OF A FLUID IN A CONTAINER のような一般的に現実体験されたメタファーに基づいているため、容易に理解することができる²⁴。

5. 構成原則 (Constitutive Principles) と統率原則 (Governing Principles)

ブレンディング理論の原則には、構成原則 (Constitutive Principles) と統率原則 (Governing Principles) がある。これらは、恣意的な解釈を防ぐための制御を提供する。ほとんどのメタファーは直感的に理解できるため、構成原則と統率原則をその釈義において厳密に考える必要はない。しかし、以下の章で分析するメタファーのように難解なメタファーについては、これらの原則はメタファーの可能性を判断するための助けとなる。この2つの原則には、どちらも同じ目標がある²⁵。それは、「人間的な尺度を達成すること、すなわち容易に理

American English,” in *Cultural Models in Language and Thought*, ed. Dorothy C. Holland and Naomi Quinn (Cambridge: Cambridge University Press, 1987), 195–221.

²³ Keiko Matsuki, “Metaphors of Anger in Japanese,” in *Language and the Cognitive Construal of the World*, ed. John R. Taylor and Robert E. MacLaury (Berlin: De Gruyter Mouton, 1995), 135–51.

²⁴ Fauconnier and Turner, *The Way We Think*, 126–30.

²⁵ Fauconnier and Turner, *The Way We Think*, 309–51.

解でき熟知されている枠組みの中で、直観的な認知と行動を表すこと」²⁶である。

構成原則は、スペース間マッピング (写像)、融合スペースへの選択的投射、融合スペース内での創発的でユニークな構造の展開などの原則である。これらの構成原則は、あらゆる認知プロセスに極めて強力な制約を与える²⁷。

統率原則とは、「創発構造 (emergent structure)²⁸を最適化するための方策」である²⁹。統率原則の4つのタイプは、圧縮の関係性によって、さらに4つに分類される。それは、1) 関係がそれ自身のよりコンパクトなバージョンに圧縮される、2) 1つもしくはそれ以上の関係が別の関係に圧縮される、3) 融合スペースの中に新しい関係が創り出される、4) ハイライト圧縮、以上の4つである³⁰。本論文では、すべての統率原則については論じないが、重要な原則であるトポロジーの原則 (topology principle) について説明する。トポロジーの原則は、起点スペースと目標スペース、およびそれらの外部スペース関係における有用なトポロジーが融合スペースの内部スペース関係に反映されることを示す。言い換えれば、それらがメタファーとして用いられるためには、起点スペースと目標スペースの間に一貫した十分なトポロジーを持たなければならない。後述のテストケースでトポロジーを示したい。

²⁶ 「人間的な尺度の達成は、5つの方法によってなされる：1) 拡散しているものの圧縮、2) 全体的な見識の獲得、3) 重要な関係性の強化、4) 物語の想起、5) 多から一へ」 Fauconnier and Turner, *The Way We Think*, 311.

²⁷ Fauconnier and Turner, *The Way We Think*, 309–10.

²⁸ 起点スペースと目標スペースから融合されることにより、融合スペースにおいて新たに創り出された構造。

²⁹ Fauconnier and Turner, *The Way We Think*, 310.

³⁰ これらの4つのタイプは次のような統率原則に分類することができる：「トポロジー (Topology)」、「パターンの完成 (Pattern Completion)」、「統合 (Integration)」、「関係の最大化 (Maximization of Vital Relations)」、「関係の強化 (Intensification of Vital Relations)」、「ウェブ (Web)」、「解荷 (Unpacking)」、「関連性 (Relevance)」。

Fauconnier and Turner, *The Way We Think*, 309–51.

Ⅲ．認知的アプローチの手順

この章では、ブレンディング理論に基づいて、予型を解釈するための基盤である認知的アプローチを提案する。聖書のメタファーや予型を理解する前に、まず一般的な釈義がなされなければならない。釈義は、メタファーや予型の解釈と同様に、そのすべてのステップにおいて探究しつつ発見して理解を深めていくものである。祈り、本文批評、ワード・スタディ、文法分析、聖書箇所構造、ジャンルの特定などのステップは、予型を正しく理解して解釈するために、聖書釈義の最初に、及びそのプロセス全体を通して行われなければならない。認知的アプローチは次のようなステップを用いて、予型の候補に対して釈義的なアプローチを行う³¹。

- ① メタファーの予型と対型を特定する。
- ② メタファーの領域 (scope) は何か。1人の人か、事物か、場所か、あるいは出来事全体か。
- ③ テキストの概念を確認する。キーワードのさまざまな定義を検討し、その単語やフレーズの概念を考える。このことから鍵となる要素と関係が特定される。(要素と関係は必ずしも言語的に表現される必要はない。)
- ④ メタファーの鍵となる要素と関係を特定する。すべての要素と関係を記述する必要はない。
- ⑤ ネットワークをマッピングする。ネットワークの種類 (ミラー、シングルスコープなど) を確認し、完全なマッピングを行う。

³¹ ビールは、釈義は学術であり、人間の罪深さのために、いかなる解釈者や方法論も絶対に正しいということはないと繰り返す。釈義は正確な科学ではなく、蓋然性を扱うものである。旧約聖書のように遙か昔の文化を扱う場合、ある程度の主観が解釈に入らざるを得ない。これはもちろん、うまく解釈することが不可能であるとか、不十分であるという意味ではないが、私たちの罪深さのゆえに、結論に対しては常に謙虚な姿勢を保つべきである。私たちは「旧約聖書や新約聖書の著者のように、靈感による確実性を予型的解釈に再現することはできないが、何百年にもわたる聖書の歴史の中で、聖書の著者たちがこのような方法を一貫して用いてきたことは、今日、すべての聖徒たちが用いることができる方法であることを強く示唆するものである。」 Beale, *Handbook*, 25.